

N052



読書のまちかわさき

## 読書のまち・ かわさき通信

読書のまち・かわさき事業推進委員会 会長

### “『4月23日』に寄せて”

ちょっと寄り道をどうぞ(1)

なぜ4月23日は「本の日」なのでしょう？

西暦303年、4月23日に殉職した騎士がいました。その騎士の名をサン・ジョルディこと聖ゲオルギウスと言いました。

スペインのバルセロナを中心とするカタルーニャ地方の守護聖人であるサン・ジョルディの伝説について少しだけふれていきましょう。



シレナという町の近くの湖に、荒々しいドラゴンが住んでいました。町の人々は、毎日ドラゴンに羊を2頭捧げていましたが、羊が不足し、羊を1頭と、その代わりに、若い人間を捧げるようになりました。そのために、若い男女が減り、王様は、自分の姫を捧げる決意をします。その窮地を救ったのが、たまたまそこを通りかかったゲオルギウスでした。ゲオルギウスは、町の人々の前でドラゴンを退治しました。ゲオルギウスの行動を見て、たくさんの人々がキリスト教にすがり、教会を建てました。



「サン・ジョルディの日」は、勇敢にドラゴンに立ち向かったひとりの騎士の姿が、町の自治や言語を抑圧する独裁政治と闘う市民の精神と重なったことで、生まれた日だと言えるようです。



では、なぜ、「サン・ジョルディの日」が「本の日」なのでしょう？

4月23日は、『ドン・キホーテ』の作者、ミゲル・セルバンテスの命日(1616年)であり、さらに、ウィリアム・シェイクスピアの誕生日(1564年)であって、命日(1616年)でもあるという、文学に非常に縁のある日なのです。彼らに敬意を表して、4月23日は、ユネスコにより、「世界本の日」に指定されたということです。そのことと結びつけて、女性は、男性に本を贈り、男性は、女性に花を贈り合うのです。



そんな経緯も手伝って、2001年、日本でも、この4月23日が、「子ども読書の日」に定められたのです。

## ちょっと寄り道をどうぞ(2)

## 本との「出逢い」を交流しよう♪

本は誰かに勧められたからといって即座に「いただきます」と言って読み始めるものとは違います。普段、図書館の本棚や書店の店先に並んでいても、意識していないので、通り過ぎてしまうことがほとんどです。これは、本に限ったことではありませんが、人は意識していないと、そこに人やものが存在していても、その存在そのものが見えないものなのだと感じるが多々あります。

某出版社が刊行している雑誌の2005年11月1日号で、『旅にもっていく本! 全263冊』という特集を組んだことがあります。その雑誌のページをめくると、普段、何気なく並んでいる本が、「おやっ、何だ」と思えて、立ち止まって、本を手に取りたくなるような気分になってきます。この雑誌の企画を真似して、少し遊び心を加えて、記事をつくってみるとこんな感じです。



### 『夜と霧』

V・Eフランク  
みすず書房 1200円

### うっさ武 (25歳)

●ラグビー選手

活かされて生きている自分に気づかされたこの一冊

判断力と優れた身体運用によって驚異的なトライを実現し、何度も窮地を救っているバックス選手。  
日本代表キャップ8

大学時代に、チームにおける自分の存在の意味について深く悩みました。そんな時に神保町の古本屋で偶然に出逢った一冊です。人は誰でもそれぞれ使命が決まっています、そのことに気づき、どのように応えていくかで、人生が拓けていくという考えをその頃から持ち始めるようになりました。必要とされて活かされている存在だとしたら、自分がなすべきことは意外にも簡単に見つかるかもしれません。人生が180度変わった類まれな出逢いでした。

よく、「自分探しの旅」なんていう言葉を耳にしますよね。フランクルの考え方は、まったくその逆なのです。人生の方が私たちに問いを投げかけているというのです。私たちがその問いに気づき、考え、行動を起こす過程そのものに、人間性回復、自己再生のドラマがあるのだと教えられました。

どんな極限状態におかれていても、人生からの問いかけに誠実に向き合い、全身全霊を傾けることで、自分が進む道が拓けてくるのです。

フランクルの本を何冊か読んでいく中で、患者さんとのこんなやりとりが記されていました。奥さんを不慮の事故で亡くされた男性が、人生は絶望でしかないと嘆いていました。フランクルは、こう訊ねました。「もし、あなたの苦しみを奥様が背負ったとしたらどうですか?」。男性はとてもこんな苦しみを妻には味わわせたくないと答えました。その言葉に寄り添うように、フランクルはこう言いました。「そうでしょ。この苦しみに向き合い、生の輝きに火を灯すことができるあなたが活かされて生きているのです」。

人には誰にでもなすべき使命があるのではないのでしょうか。そのことに気づくことで人は、何かを取り戻し、人生を生き直すことができるのだと信じています。ピンチになればなるほどラグビー場の芝で燃えているぼくは、それが自分の使命だと思っているからこそその躍動感を表現しているのだと思っています。これからも、競技場まで熱いプレーを観戦しに来てください。



## ちょっと一息詩をどうぞ

『文詩集かわさき』第54号から

### 成長

一年生のランドセル  
ピカピカのつるつる  
背負うと  
背中の全部がおおわれる  
まだまだ大きく重いけど  
夢がいっぱいいっぱい  
六年生のランドセル  
使い慣れたキズもある  
背負うと  
背中の半分だ・・・  
「大きくなったね。」  
ランドセルに言われたみたい  
私の小さな幸せです

(六年生作品)